

バクーニンとジュラ支部

——社会民主同盟とロマン連合(統)——

渡 辺 孝 次

はじめに

前稿で述べたように、⁽¹⁾一八六八年九月末にベルンでバクーニンらが結成した「国際社会民主同盟」(以下「同盟」と略記)はその後ジュネーヴに中央支部を開拓し、また結成当初のロマン連合内部で大きな影響力を得た。ところで、ロマン連合におけるジュネーヴと並ぶ中心地に成長しつつあったジュラ地方に存在していた諸支部(支部の一つではないが、以下便宜上「ジュラ支部」と記す)、第一インターナショナルの歴史において同盟と切っても切れない関係を持つ運命をたどることになるこのジュラ支部とバクーニンとのつながりが確立されたの

もまたロマン連合の結成大会においてであった。両者の関係は、ジュラ支部の指導者の一人であったジェイムズ・ギョーム James Guillaume⁽²⁾とバクーニンとの邂逅によって始まった。本稿の課題は、第一には、このジュラ支部とバクーニンとの運命的な出会いの模様ならびにジュラ支部内に「バクーニンの」な立場が確立される過程を描くこと、第二には、この過程を通してロマン連合内部にジュラとジュネーヴの対立の兆しが生み出されていったことを示すことにある。この対立は、その後ロマン連合の分裂を招来し、さらにロマン連合の分裂は、結局はインターナショナル全体の分裂を招来したのである。

一 バクーニンとジュラ支部との邂逅

(一) バクーニンのジュラ訪問

ロマン連合の結成大会は、一八六九年一月初めにジュネーヴで開かれた。この大会は、それまで統一のとれていなかったスイスのフランス語系諸支部を結合する統括組織を誕生させるという意義を持ったが、また別の面でも大きな意義を持った。すなわち、大会期間中にジュネーヴでの宿をバクーニンがギョームに提供したという偶然を通して両者が出会い、それによってバクーニンとジュラ支部との結びつきが運命づけられたことである。両者のこの時の会談の内容は詳しくは分からないが、ギョームは、バクーニンに対して最初から好感を抱いたこと、それで宿提供の申し出を喜んで受け容れたこと、その後比較的短期間のうちに、基本的な点においてはバクーニンとほぼ完全に見解が一致するのを発見したことを述べている。

この時に結ばれた交遊がきっかけとなって、この年二月にバクーニンはジュラ地方の小都市ル・ロクルの支部を訪問した。これに先立ちル・ロクルの労働者の間では、

この有名なロシアの革命家の噂でもちきりとなった。二月二十日土曜日の午後にはこの町に到着し、夜の晩餐会に出席し、翌日曜日には「人民の哲学」と題する二つの講演を行なった。その一つ目は、創造主を前提とする宗教の不合理を説くものであり、二つ目はブルジョワジーの栄光と墮落の歴史に関するものであった。後者の内容は、ブルジョワジーはフランス革命以前には偉大で歴史の進歩を担う階級であったが、今日においてはかつての貴族階級と同じ支配し搾取する階級に墮している。人類の生きた力は今ではプロレタリアートの側にあり、前世紀の大革命にも比すべき革命によって彼らはブルジョワジーの支配を覆すであろう、という主旨であった。この講演はル・ロクルの労働者たちを魅了した。ギョームによれば、この支部の「メンバーの大半にとってそのような思想が語られるのを聞くのは初めてであり、その印象は強烈であった」。講演会の後にはダンス会が催されたが、バクーニン自身は別室で支部のおもだったメンバーと談笑した。主要メンバーとの会合はその翌日にも再び行なわれ、バクーニンは巧みな話術で彼らの心をとらえた。それは例えば、はっきりなしにたばこを吸う彼に

向けての、革命になってたばこが手に入らなくなったかどうかの質問に、そうなたら革命を吸うまでだと答えたとか、彼の考える人間の幸福とは、「第一に自由のために闘い死ぬこと、第二に愛と友情、第三に科学と芸術、第四に喫煙、第五に飲酒、第六に食事、第七に睡眠」だと述べたという類いの弁舌の巧みさであった。

さらにバクーニンは、この機会に秘密の同盟に加わることをギョームらに密かに勧めた。この時ギョームの理解したバクーニンの秘密組織とは、上からの命令に絶対服従の古典的秘密結社とは異なり、形式ばった手続きや神秘的儀式のない、同じ理想を追求する者同士が集団的な行動を実現するための自由な結びつきであったという。そこで彼は加入の勧めを受け容れた。ル・ロクルにおけるもう一人のリーダーであるC・ムロン Meuron も間もなくこれにならった。⁽⁵⁾ ル・ロクル支部の主要メンバーとの公けの会合の場では、バクーニンはこの町にジュネーヴの例にならう公然の同盟の地方支部を作ることを提案した。しかしその場に居合わせたメンバーは、バクーニンによって示された同盟の綱領には賛成しつつも、インターナショナルの内部にこれとは別の先進集団を作る

のは好ましくないと反論し、同盟の綱領は今ある支部の内部でも広めうるとの立場からバクーニンの提案を拒否した。⁽⁶⁾ しかしバクーニンの樂觀的想像力の前には、ル・ロクルのメンバーの示した明白な拒否も通じなかったらしく、三月初めにギョームがこの支部の機関紙『プログレ』の定期購読者の紹介を手紙でバクーニンに依頼すると、彼はこの依頼を同紙を同盟の機関紙にするという提案と勘違いしあらゆる協力を惜しまないと返事をした。ギョームはこの予期せぬ返事に驚いたが、この提案に従うことはなかった。⁽⁷⁾

この時ル・ロクルの労働者たちから受けた歓待と彼らの示した深い共感、バクーニンを感激させ、彼をしてさっそくジュラの労働者たちに最大級の謝意を表明させた。それは、『プログレ』紙に載せられたバクーニンの公開書簡の中に述べられている。このようにして同紙へのバクーニンの寄稿が開始されたが、寄稿は同年十月に彼がスイスのイタリア語圏の町ロカルノへ移るまでほとんど毎号のように行なわれた。彼の記事はシリーズを成しており、最初の四回が講演の内容を反映したと思われるブルジョワジー批判を主題とし、後の六回分は愛国心

に關する考察と批判がテーマであった。前の論点に關して注目すべきは、バクーニンがいきなり十八世紀のフリー・メイソンを「ブルジョワジーのインターナショナル」と形容していることである。理由は、この秘密結社の追求した理念が「十八世紀人道主義思想の強力な具現」であり、さらにはこの「封建的、君主制、神的な圧政に対する革命的ブルジョワジーの普遍的な陰謀組織」がフランス革命の成功に大いに貢献したからとされた。

この指摘は、筆者には、当時のバクーニンの抱いていた秘密結社およびインターナショナルに關する觀念を知る手がかりとして極めて興味深く思われる。なぜならこの指摘は、同盟、ことに秘密の同盟のモデルとしてバクーニンが何を思い浮かべていたかを示しており、さらには、インターナショナルがどのように組織されるべきかに關するバクーニンの構想も示していると筆者には思われるからである。記事に關しそれ以外では、社会主義とは、ブルジョワジーが理論の上で到達したが彼らにとって自殺行為でもある論理的帰結にはかならないとする主張や、国家教会の觀念論のシェーマにおいて、現実を偽り理想を抽象の中に追いやることによって現存する支配の構

造を隠蔽しているものすべてを弾劾しているくんだり、ヘーゲル左派的な彼の発想を示すものとして興味を引くといえよう。これに對し、この主張から派生した「国家的宗教」たる愛国心に關するシリーズは、それを(1)自然的ないし生理的要素、(2)経済的要素、(3)政治的要素、(4)宗教的ないし狂信的要素に分類し、しかもバクーニンに特徴的な「學識」披露癖(後にツルゲーネフはバクーニンをモデルとした小説『ルージン』にそれを描いている)を反映して、六回の記事をもつてもほとんどその(1)を論じただけに終わっており、一般の労働者にとつてはペダンティックすぎたのではないかと思われる。しかし(1)を論じただけでも、彼の『プログレ』へのこの定期的な寄稿が、ジュラにおける彼の思想の普及に寄与したことは確かであろうと思われる。

(二) ジュラにおける「政治的兼權主義」の確立

さてジュラでは、その後五月三十日に、ル・ロクルとジュラ地方最大の都市ラ・ショー・ド・フォンのちょうど中間にあたるクレ・デュ・ロクル Cret du Looche において、「インターナショナル目的を実現するための手段は何か」を主題とする合同集會が開かれた。ギョーム

によれば、あいにくの土砂降りの雨をつけてこの会には三百名近いメンバーが集まった。この会にはまた、遠路をおして、カントンの境を越えたベルン側ジュラからクルトラリー地区の支部代表(A・シュヴィッツゲーベル Schwitzgüebelら)も出席し、カントン・ヌーシャテルとベルナージュラの支部を初めて結びつけたという点においても画期的であった。さらにジュネーヴからもバクニンと、当時同盟中央支部の書記であったF・エング Heng が出席した。⁽⁹⁾

この会では四項目の決議が採択されたが、その決議三は以下のような内容であった。⁽¹⁰⁾

集会は、『エガリテ』や『プログレ』が行なっているような社会主義原理の弁護の仕方を承認し、『モンスターニユ』の採っているような行動方針とは完全に縁を切ることを宣言する。さらに集会は、インターナシヨナルはブルジョワ政治への参加を完全に放棄すべきであると宣言する。

後にバクニン支持者のスローガンとなる「政治的棄権主義 abstentionisme」が、その後半にすでに明言されていることをどう理解すべきであろうか。会の記録を

見ると、そこにおけるバクニンの発言にはこの点に關する言及はまったく見られない。⁽¹¹⁾ 実際にはこの決議三は、バクニンとは違う筋から提案されたのであった。すなわち、この会で決議案三が採り上げられた経緯は次のようであった。まずCh・ペロンの書いた、P・クルリーの戦術と彼の党の機関紙『モンスターニユ』が「社会民主主義の機関紙」を名づけていることへの批判から始まる、ブルジョワジーとの和解を目指すあらゆる試みを批判する手紙が読み上げられた(ペロン自身は会に欠席した)。これを受けてギョームが事情をさらに説明し、今こそクルリーに対し完全に絶縁を宣言しなければならぬと提案した、というのがその経緯であった。⁽¹²⁾ 紙面の関係でより詳しい説明は別の機会に譲らざるをえないが、ここで当時のカントン・ヌーシャテルの政治状況と、その中でクルリーの採った選挙戦術を概説しておこう。

ジュラ地方におけるインターナシヨナルの先駆者であるビエール・クルリー Coullery (一八一九—一九〇三)⁽¹³⁾ は、一八四八年以来一党独裁の体制を保っていたカントン・ヌーシャテルの急進派との対立を次第に深め、一八六七年夏にはこれから独立した政党的結成を実現させた。

しかしながら彼は、有効投票数の過半数を得た候補のみを当選とする（いわゆる scrutin majoritaire, Majorzsystem に則る）少数政党に致命的に不利な現行選挙法の改正なしには自派に見込みはないと見て、一八六八年五月のカントン議会選挙に向けて、彼の党同様に少数政党であった保守派と選挙協力をするという戦術を採った。こうした選挙戦術を含めた彼の方針は「クルリー主義」と呼ばれたが、これは当時のヌーシャテルの政治状況を考えれば、議会内に労働者の勢力を確保するために残されたほとんど唯一の可能性であった。実際、インターナショナル代表を当選させるために従来同様急進派と選挙協力をするという戦術で同じカントン議会選挙に臨んだル・ロクル支部の方は惨敗を喫したのである。しかし、たとえ選挙法改正に向けての一時的な戦術にすぎないとしても、ジュラ支部内にはクルリーの目指す「貴族社会主義者連合」⁽¹⁴⁾に反発する者が多く出た。さらにクルリーは、同年九月に開かれたインターナショナル・ブリュッセル大会で土地の共有制を求める決議が下されたことなどを激しく攻撃したが、これが決定的な契機となって、ジュラ支部はこの時点でクルリー主義と縁を切りこれを

最終的に克服しようとしたのである。

以上が当時のカントン・ヌーシャテルの政治状況とクルリーの戦術の説明であるが、このようなわけで当時のジュラ支部にとっては、決議三はバクーニン支持の始まりという以上にクルリーに対する決別であった。一見するとバクーニンの色彩が極めて濃いように見えるが、決議三は実はジュラから自生的に生まれたものと理解されるのである。つまり、決議三の前半部と後半部は切り離しがたく結びついているのであり、決議全体の意味は、クルリー派の機関紙である『モンターニュ』紙の説くような保守派との選挙協力の方針には反対であり、このような形で「ブルジョワ政治への関与」は一切退けるということにほかならなかったのである。

そのことは、決別を言い渡されたクルリーの側の反応からも確認しうる。すなわち、これらの決議が『プログレ』紙に発表されたのを見たクルリーは、六月末から『モンターニュ』紙上で激しい『プログレ』批判を開始した。ギヨームの側でもこれを受けてすぐに反論を展開し、この年の七月はあたかもこの両紙の決闘のごとき観を呈した⁽¹⁵⁾。このように、決議三の後半部をクルリーがす

ぐに自分の戦術に向けられたものと受け取って反論したこと、一方、ギョームの側もそのような理解の下に再反論をしたこと、さらに、間もなくして『エガリテ』紙を通してこの論争に参加したバクーニンのクルリー批判もまた同じ性格を呈していること、これらすべては、この時期のジュラにおける政的棄権主義とは実は紛れもなく反クルリー主義の立場から発せられたものであることを物語っているのである。

一方途中から論争に参加したバクーニンにとっては、ジュラ支部が今まさに克服せんとしていたクルリー主義とは、平和自由連盟脱退以来彼がくり返し論難してきた彼の言うところの「ブルジョワ社会主義」の一種にほかならなかつた。この語をもって彼の言わんとしたものは、平和自由連盟に代表される急進民主主義者の口先だけの社会主義、彼の表現で言えば「ブルジョワの政策と労働者の社会主義の間の和解を我々に向かって説こうとする」もの、「ブルジョワ階級には社会組織の一切の恩典を、労働者には悲惨を取っておくことを目的」とする「社会主義」であつた。⁽¹⁷⁾したがってバクーニンの批判は、もともとクルリー主義という地域的に限定された対象に

とどまらず「ブルジョワ社会主義」一般というより大きな対象に向けられていたといえる。そのような時期にクルリー主義の超克という動きがジュラ支部に生じたため、同様の批判がクルリー主義にも向けられたのであつた。

ところで、この点に関連して次の二つのことを指摘しておきたい。まず第一には、ロマン連合内部にこの時期に生じた動き、特にジュラ支部に生じたクルリー主義の超克の動きが、バクーニンに対して議会主義の無益を確認させる材料を提供したと思われることである。

確かに彼は、それ以前にも議会主義に対しては否定的評価しか抱いていなかったであろうが、⁽¹⁸⁾ロマン連合内部でこの時期にジュネーヴの時計工グループが急進派と選挙協力をする方針を固めたこと、および他方でジュラ支部の方はクルリー主義の超克のために政治的棄権主義の立場を宣言したという経緯の影響を受けて、議会主義に対するバクーニンの否定的態度はますます強化されたのではないかと考えられるのである。そして、バクーニンにとってはクルリー主義もジュネーヴ時計工の路線も「ブルジョワ社会主義」であつたことからすれば、ロマン連合内部の動きを観察した結果、バクーニンの内部で、同

盟の綱領に謳われた政治活動に関する規定(第四条「資本に対抗する労働者の大義の勝利を即時かつ直接的な目的とし、ない政治活動はどんなものであれ退ける」前稿参照)、「ブルジョワ社会主義」批判、そして具体的に選挙という対象に向けられた政治的棄権主義が混然一体となつたのではないかと思われるのである。であるとすれば、ロマン連合内、ことにジュラ支部内部に自生的に生じた動きが逆にバクーニンにも影響を及ぼしたのであって、それを確認しておくことは重要であろう。

第二には、バクーニンの理解ではこの「ブルジョワ社会主義」は、平和自由連盟の存在理由を否定したブリュッセル決議(前稿参照)によってインターナショナル自身からも否認されたものと捉えられたことである。つまり、彼は「ブルジョワ社会主義」を論駁する自分の立場を平和自由連盟に関するブリュッセル決議の論理的帰結と考えており、クルリー批判などを介してそれと関連づけられた政治的棄権主義がインターナショナル内部に論争を、ましてや分裂の危機を生み出そうとは考えていなかったにちがいないのである。そしてこの点に関しては、ジュラ支部も同様であつたらう。

二 同盟をめぐるその後の展開

(一) 同盟の組織改編Ⅱジュネーヴ社会民主同盟支部の発足

前稿で述べたように、同盟の勢力は一八六九年六月の時点で早くも大きく衰えていた。したがって、六月二六日に行なわれた同盟支部への署名会、すなわち国際組織としては解散しジュネーヴの一地方支部に生まれ変わった同盟への署名会に実際に出頭した者の数もわずか二二名にとどまった。これに、すでにこれ以前に署名を済ませていた者を含めても、この時集まった署名数は四十人にすぎなかった。このような重要な会への出席状況からも、ジュネーヴにおける同盟の影響力がすでに大きく衰えていたことが分かる。⁽¹⁹⁾

M・ネットトラオが確定した、組織し直された「ジュネーヴ社会民主同盟支部」のメンバー・リストによれば、この年の終わりまでにこの支部に加入したジュネーヴ在住のメンバー数は五十名足らずであり、国際社会民主同盟時代からのメンバーはさらにこれの半数を占めるにすぎず、つまり前年の創立メンバーのうち三分の二に当た

る実に六十名近くがこの時点までに同盟から離れたことになる。このようにジュネーヴでの勢力は大幅に減退したのに対して、この新生同盟には、本来ジュネーヴの一方地方支部という位置づけであったにもかかわらず、一八六九年夏以降、この町には住んでいないメンバーの数が増加していった。このようなジュネーヴ外のメンバーの増加の結果、この年の末には新しい同盟支部のメンバー数は八十名近くに達した。これからジュネーヴ在住の五十名を除いた他の三十名のメンバーの内訳は、スペイン人九名、イタリア人七名、ジュラ人六名などであった。しかもその中に、後の時期にバクティン派として反マルクス勢力を形成した中心人物たちが名を連ねているのを見れば、マルクスらの主張した「公然の同盟」隠れ襲説⁽²⁾もあながち事実無根とは言えないように思われる。このあたりに同盟という組織の性格の複雑さがあるがわかるが、この複雑さは、前稿で述べた秘密の同盟の存在によってますます程度を増すのである。

しかし、ジュネーヴにおける同盟の実勢力の衰退とは裏腹に、一八六九年夏はバクティンが『エガリテ』紙の編集長の座につき、クルリー主義に対する批判などを契

機として大々的に「ブルジョワ社会主義」批判を展開した時期となった。一方ジュネーヴ支部の方は、前稿で述べたように同盟から離れて次第に穏健化しつつあり、またその中の時計工グループは、自分たちの代表を選挙に出すために急進派と協力するという方針を固めつつあった。ロマン連合の機関紙という性格を考慮して、クルリーに向けたような直接的な攻撃はジュネーヴ時計工に向けては控えられたとはいえ、『エガリテ』紙上でバクティンが展開した批判は、内容的には当然時計工グループの方針にも向けうる性質のものであった。実際、経済的平等化を拒否するというバクティンが「ブルジョワ社会主義」の特徴とみなしていた側面、この時期で言えば具体的には土地所有の社会化要求の否定や相続権廃止要求の拒否は、後述するように時計工グループにも共通していた。したがってバクティンの「ブルジョワ社会主義」批判は、時計工グループにとって極めて都合が悪かったのである。このようにして、ジュネーヴ支部を牛耳る時計工グループと同盟は次第に対立関係に陥っていった。両者の争いは、バーゼル大会に向けての準備の討論においてどうにもならない対立となって露呈することになる。

(一) 総評議会による同盟の協会加入承認

同盟の中心人物の一人であったペロンが、六月二二日に、組織を改編し国際組織としての性格を放棄する宣言を含む手紙を総評議会に出したことは前稿で述べた。これを受けて総評議会の側は、七月二七日の定例集会でマルクスが受け入れの提案をし、これが全会一致で決定され、この翌日にその旨を同盟に通知した。⁽²³⁾ この通知を受けて同盟側では、七月三一日に開かれた一般集会の場で、半年以上にわたる折衝を経てついにインターナショナル加入を承認されたことをバクーニンがメンバーに伝えた。また、それと同時にこの集会では、インターナショナルの正規の支部として会費をすぐに総評議会に送ることが決議された。⁽²⁴⁾ この決議は間もなく実行に移され、これを受けて総評議会は、確かに会費を受け取った旨の領収通知を八月二五日付で同盟支部に送った。⁽²⁵⁾

かくして、E・H・カー流に言えば「木馬はトロイの城内に入った」⁽²⁶⁾ わけであるが、ここで、加入承認を提案したマルクスらが、それがその後にもたらすことになった結果をこの時点で予想していたかという疑問が生じる。事が始まってから一応の決着をみるまでの一八六八年末

から一八六九年夏にかけてのマルクスとエンゲルスの往復書簡などを見る限りでは、何とも言いがたい。ただしつきりしていることは、彼らが初めからバクーニンのインターナショナル加入（彼は個人としては、一八六八年七月にジュネーヴ中央支部に加入していた⁽²⁸⁾）を警戒しながらも、同盟に対してあまりに大袈裟な対応をすることによってかえってこれに重要性の外観を与えるようなことをしてはならないとする外交的慎重さを一貫して保つたことである。しかし、このような彼らの慎重な態度は、バーゼル大会以降には大きく変化してゆくのである。

(三) バーゼル大会前のジュネーヴ支部の紛糾

最後に、バーゼル大会を前に生じたジュネーヴ支部内の紛糾を説明する。前に述べたように、ジュネーヴにおいては、一八六九年夏にはバクーニンの率いる同盟勢力と地元の時計工グループとの対立が明白になりつつあった。この対立は、バーゼル大会に向けてのジュネーヴ諸支部の合同討議においてその和解不能な性質を露呈した。ところでこの争いに関しては、バクーニン自身の説明以外に詳しい史料がない。⁽²⁹⁾ 争いの一方の当事者による説明であるから当然一面的であるおそれがあるが、できる限

り彼の語り以外の客観的史料をも採り入れつつ以下それを整理してみよう。

前稿で述べたように、時計工グループは急進派との協力の下に、この年の十一月に行なわれる予定のカントン閣僚 (Conseil d'Etat)⁽³⁰⁾ 選挙に自分たちの代表であるグロスランを候補者の一人として立てることを決めていた。しかし彼らの計画にとっては、バーゼル大会の議案に含まれていた土地の共同所有の問題と相統権の廃止に関する問題は極めて都合が悪かった⁽³¹⁾。選挙における協力相手である急進派がこのような「共産主義」を歓迎するはずがなかったのである。そこでこのグループはこの二つの問題にはできるだけ触れない作戦を採り、今やこのグループにほとんど支配されていたカントン連合委員会は、この二つの議案に関しては検討委員会の設置を提案しなかった。しかし、八月初めに開かれたジュネーヴ支部連合の全体会において同盟支部がこれを追及した。そして結局同盟の主張が通り、土地所有問題に関してはP・ロバン Robin を、相統権問題に関してはバクーニンを委員長とする検討委員会を設置せざるをえなくなった⁽³²⁾。両陣営の争いは、大会に代表をどのような形で送るか

を話し合うその次の集会においても展開された。インターナショナルの大会に対してはどの支部にも一名の代表を送る権利が与えられていたから、当時三十近い支部数を数えたジュネーヴは三十名近い代表を送りえた。しかしこれでは費用がかかりすぎるとの理由で、ジュネーヴ支部連合全体を一括し、それをまとめて代表する代表団を送るという案が支持されていた。実際、旅費のかさんだ前回のブリュッセル大会には、この方式に則って四名の支部連合代表団が送られた。ところで、この案が支持されていたことを利用して時計工グループは、土地問題と相統権問題に関しては棄権するという条件つきでなければこの代表団方式を支持しないと主張したのである。これは、時計工グループ以外の支部が財政的に貧しく、独自に代表を送るのは費用の面で苦しいという事情をついたこのグループの作戦であった。しかし、ここでも再び同盟側の反論が展開され、結局そのような条件づけには応じないことを決めたのである。そこで、時計工グループはその後に自分たちだけの集まりを持ち、その場で、時計・オルゴール・宝石装身具 (bijouterie) 製造業に従事する七支部はH・ペレを独自の代表とし、都合の悪い

所有と相続に関する議案には棄権することを決めた。⁽³⁴⁾これに対し、この七支部以外のジュネーヴ支部連合の代表としてはF・ブロッセ Brosete、前述のエング、そして時計工グループに属するグロスランが選ばれた。バクーニン自身は、この三人に次ぐ次点で代表からもれた。⁽³⁵⁾

この後八月末に、バーゼル大会の議案に対する支部連合としての態度を決定するための全体会が開かれた。同盟派はここにおいても勝利を収め、その場でロバンとバクーニンをそれぞれ長とする二つの検討委員会の報告が承認され、土地共有制と相続権廃止の両案に賛成することが決定された。⁽³⁶⁾その結果、支部連合代表であるグロスランに対してもこの二議案に賛成票を投ずることが拘束されてしまった。しかし、これは閑僚候補である彼にとってどうしても受け容れられないことであった。そこで彼は、大会に出発する前日にカントン連合委員会と会合を持ち、この時この委員会から支部連合の決議に拘束されないとの約束を取りつけるのに成功した。このような密約を行なったことに対しては大会そのものの場でブロッセが抗議したが、⁽³⁷⁾スキャンダルを避けるために結局それ以上の追及は行なわれなかった。

時計工グループとこのように闘うのと平行して、バクーニンはバーゼル大会に自派の勢力をより多く代表させようと様々な秘密工作を行なった。例えば、彼がナポリの機械工支部とリヨンの絹糸捻糸女工支部の代議権を得たのもこの工作の結果としてであった。⁽³⁸⁾実際彼自身が、リヨンのA・リシャル Richard への手紙に、秘密の同盟である「親友団」のすべてのメンバーに必ず大会に出席せよと指示したこと、またそれだけでなく大会直前に「親友団」だけの内輪の集まりを組織したらしいことを書いている。⁽³⁹⁾地元ジュネーヴにおいても、彼は当然、自ら支部連合の代表に選ばれるよう工作したものと推測される。にもかかわらず、実際に選ばれたのは前述したようにブロッセ、エング、グロスランであり、バクーニンは次点の第四位に終わった。同盟の牙城であった『エガリテ』紙は、これを、バクーニンの代表としての地位が同盟支部および前述のリヨン支部から保証されていて安泰であることを支部連合が知っていたからであると弁解したが、⁽⁴⁰⁾前稿で紹介したジュネーヴ大学のヴェイユミエー教授が指摘しているようにこれは一種の負け惜しみであって、⁽⁴¹⁾実際にバクーニン個人のジュネーヴにおける

人気がこの程度であった考える方が良いでしょう。

そして、同じくヴェイユミエー教授によれば、まさにこの秘密工作こそが、この年の夏に、すなわちこの工作の行なわれた時期に、これまで同盟の中心メンバーであった者の中にすらバクーニンに反発する者が多数出たことの原因であった。つまり、それまで自分では同盟の中心メンバーだと思ひ込んでいたにもかかわらず、秘密工作の実行に際してはまったく無視された者が、自分は単に利用されていたにすぎないということに気づき反発したのである。またジュネーヴ支部の一般メンバーの多くも、このような陰謀めいた工作に対する嫌悪感と、それによって自分たちの支部を意に反して操作されたことに対する反発から同盟に反感を抱くようになった。要するに、バクーニンの秘密結社主義がジュネーヴにおいては災いしたのである。⁽⁴²⁾

おわりに

以上前稿と本稿を通して、ロマン連合結成からバーゼル大会までの時期に、バクーニンの率いる同盟が地元ジュネーヴでは孤立し反発される存在になっていったのに

対して、同盟から離れた他方のジュラ地方では次第に支持を強めていったことを述べた。同盟の運命がこのようにパラドキシカルな経過をたどった理由はいくつかあるが、中でもジュネーヴとジュラの当時の政治事情の違いが重要な背景を成していたことは以上の叙述で明らかであろう。もう一度それを簡単にまとめると、当時ジュネーヴ支部はブルジョワ政党である急進派と協力をしても労働者の代表を立法府・行政府に送り込むことが重要であると考えていた。一方ジュラ支部の方は、自らは急進派と選挙協力して失敗し、さらには保守派と選挙協力するクルリー主義を前にして選挙に期待することを放棄するという結論に到達した、という事情がそれであった。本稿では触れなかったが、バーゼル大会で披露されたル・ロクル支部の報告から判断すると、ジュラ支部のこの立場はバーゼル大会に向けてさらに議会主義一般の否認と、この議会主義と結びついた「人民国家 Volkstaat」の発想そのものを否認する立場にまで発展し、彼らの掲げる政治的棄権主義は、クルリー主義の否認という地域問題に縛られた問題から一つの体系にまで発展したようである。⁽⁴³⁾

このように、ロマン連合内部における同盟をめぐるジュネーヴ支部とジュラ支部の対立は、それぞれの地方の政治事情を背景に両支部が下した、議会主義に関する異なる方針を根としていた。ところでこの議会主義をめぐるのは、一八六九年以降ヨーロッパ全体を舞台にしても、アイゼナハで結成されたドイツ社会民主労働者党がその意義を肯定し、他方で多くのラテン諸国ではその意義が否定されるという二極構造が成立した。したがって、地域的な政治事情の相違から生じたジュネーヴ支部とジュラ支部の対立は、萌芽的には、その後ヨーロッパ全体を巻き込んだ政治活動の意義をめぐる大論争を先取りしていたのである。この意味で、ロマン連合における両派の対立は、最初から国際問題にまで発展する要素を含んでいたといえよう。

この両派の対立は、その後ロマン連合の分裂にまで発展したが、問題にバクーニンが関わっていたために、それにとどまらずこの過程でマルクス率いるロンドンの総評議会も関与するようになり、ついには、周知のように、第一インターナショナル全体の運命を左右する問題にまで発展した。その意味で、いわゆるマルクスリバクーニ

ン問題に巻き込まれたことは、スイスの片隅に生じた対立が国際問題化する重要な契機を成したといえる。しかし、たとえマルクス、バクーニンというヨーロッパ労働運動史上の両巨人が関与したとしても、当時のヨーロッパの労働運動界はこの二人だけを中心に展開していたわけではない。それよりも、問題が国際化するに至ったより重要な理由は、ジュネーヴとジュラの対立の中心が、議会主義活動に意義を認めるか否かという、その後ヨーロッパ労働運動界を二分する問題にまで発展した重大な問題を内包していたことであつた。

最後に、論点を交えて、このようにしてバクーニンの熱心な共闘者となつたジュラ支部をマルクスらがどのように見たか論じてみよう。それを最も端的に表しているのは、ジュラ支部の中心的な指導者ギョームを単なるバクーニンの「狂信的信奉者」と表現しているマルクスの定式化である(筆者はこれを、「バクーニン『洗脳』説」と名づけた)。ジュラ支部のこのような把握は、これ以降マルクス主義の陣営に多かれ少なかれ継承されたが、このような把握には、なぜジュラ支部がバクーニンを支持したか(逆に言えば、ジュネーヴ支部がなぜ彼を支持

しなかつたか」という理由の説明がまったく欠如している。そしてまた、この問題に関する言及がないという点では、アナキズムに注目するこれまでの多くの文献も同様であつた。⁽⁴⁵⁾

しかし、これまでの叙述で明らかのように、ロマン連合という事例を採り上げた場合、対立は基本的にはジュネーヴとジュラの地域事情の相違から発生したのである。そしてこの対立においてジュラ支部がバクーニンを支持した理由も、支部内に自生的に生じた新理念(「クルリ」主義の超克)の登場をバクーニンが促したからであつて、バクーニンによって「洗脳」されてしまったからでは決してなかつた。ことロマン連合の例で見る限り、支部は常に自発的に、地域に特有な事情に即して行動したのである。

この事実をふまえそれを敷衍させる時、そこから導き出されるべき結論は次のことではないかと思われる。すなわち、第一インターナショナルのような国際的な組織の内部で争われた争点といえども、個々のグループがそれぞれの論点に賛成・反対の態度をとった背後には、常にそのグループの成立した個々の地域の具体的な事情が

控えていたであらうという結論がそれである。そして、マルクスとバクーニンの論争のような抽象度の高い、換言すればイデオロギー的な問題も同様に理解するべきであらうと思われる。マルクスを支持するにせよバクーニンを支持するにせよ、各国の活動に実際に携わっていた活動家にとっては、その理由は単なる抽象的なイデオロギーの次元にとどまっていたわけではなからう。そうではなく支持・不支持の理由は、何らかの意味で地元の抱える具体的な問題と結びついていたはずである。

このような前提に立てば、いわゆるマルクスとバクーニン論争に対して各支部のとつた態度を、この両者の影響力だけから説明するのは矢印の向きが逆であると言わざるをえない。そうではなく理由の説明は、各国の、さらにはその中の個々の地域の抱えていた具体的事情にまで掘り下げた説明が為された後に、この具体的背景の方から行なわれねばならないといえよう。そのような作業を怠ると、例えばジュラ支部という例に関しては、バクーニン「洗脳」説のような不毛な説明しか出てきやうがないのである。

同様の観点から、例えばドイツに目を向ければ、バ

セル大会においてアイゼナハ派代表のW・リーブクネヒトが、パリやブリュッセルとならんでベルリンにおいても政治問題は重要でないかもしれないと発言したことの真意は何であったかという疑問が生じる⁽⁴⁶⁾。それは、ドイツ国内の地域問題と関連していたのではないか。またラテン諸国に目を向ければ、棄権主義を支持する者がこれらの国々に多かった理由もまた、それぞれの国の国内事情に求められるのではないか。こういった様々な問いが立てられ、それに対してマルクス、バクーニンの影響とある理由に限定されないより深い説明が行なわれる必要があることを、ロマン連合の例は示していると言えるのではないだろうか。

(1) 拙稿「社会民主同盟とロマン連合—ジュネーヴにおけるバクーニンの影響力の衰退—」『一橋論叢』第一〇四巻、第二号、一九九〇年八月、参照。

(2) ジュラ支部のリーダーの一人であったギョームに関しては、D・ゲラン編集の下記アンソロジー(長谷川進訳)に収録されている、チューリヒの社会主義者F・ブルマンバッハーの書いた伝記的記事が詳しい。ギョームのファミリー・ネームは、大月書店の『マルクス・エンゲルス全集』を初めとする多くの文献(前掲長谷川氏も含む)で「ジャ

ム」と書き表されている。しかし下記のフランス語発音辞典によれば、もともとフランス語にとっては外来語である“James”というファースト・ネームは「ジャム」とは読まず、「せいぜい」ジエムス[dʒems]と読むのが精一杯である。したがって、これだけの理由でも「ジャム」は正しくない。実情は、ギョームはロンドンで生まれたのであり、彼のファースト・ネームも英語的に「ジェイムズ」と読むのが正確なようである。筆者は彼のファースト・ネームがこのように発音されるのを、スイスの第一インターナショナルの歴史に関する権威であるベルン大会のグルーナ教授とジュネーヴ大学のヴェイユミエー教授、さらには名前は忘れたが、チューリヒのゾツィアル・アルヒーフで会ったこの文書館の上級スタッフの一人の口から聞いたのでそれが正しいと考えている。D・ゲラン編、長谷川進訳『神も主人もなく』1、河出書房新社、一九七三年、二二七—二二八頁。Léon Warnant, *Dictionnaire de la prononciation française dans sa norme actuelle*, Paris/Gembloux (1987), “Les noms propres”, p. 816.

(3) James Guillaume, *L'Internationale. Documents et souvenirs* (1864-1878), Paris 1905-1910, 4 tomes (頁1-Guillaume と略示す), I, pp. 107-108.

(4) *Ibid.*, pp. 128—130. 講演の内容については Cf. “La philosophie du peuple”, *Le Progrès*, No 6, 1. 3. 1869.

(5) *Guillaume*, I, pp. 130—131.

- (6) *Ibid.*, p. 132.
- (7) *Ibid.*, pp. 138—140.
- (8) *Le Progrès* に載せられた「インターミンの公開書簡の形」の十回にわたる發表は、前半が“Aux compagnons de l'Association internationale des Travailleurs au Loe et à la Chaux-de-Fonds”と題せられ No 6, 1. 3., No 7, 3. 4., No 8, 17. 4., No 9, 1. 5., No 11, 29. 5. 1869 に掲載された。後半は“Le patriotisme”と題せられ No 12, 12. 6., No 14, 10. 7., No 17, 21. 8., No 19, 18. 9., No 20, 2. 10. 1869 に現れた。ただし前半部の第五回目は、内容的にはむしろ愛国心シリーズの第一回目であった。これに關しては、次の文献にもそれぞれ原文と邦訳が再録されてゐる。Michel Bakounine, *Œuvres* (文ト B-Œuvres と略す), I, Paris 1912, pp. 207—260; 猪木正道・勝田吉太郎編『世界の名著』中央公論社、一九六七年、三七七—四一三頁。また『プログレ』第十七号の記事の大半は創造主の存在の矛盾を扱っており、インターミンがル・ロクルで行なつた講演の前半部を反映してゐると考えられる。
- (9) *Guillaume*, I, pp. 161—162.
- (10) *Le Progrès*, No 12, 12. 6. 1869; *L'Égalité*, No 20, 5. 6. 1869; *Guillaume*, I, p. 163.
- (11) “Meeting tenu sur le Crêt du Locle, le 30 Mai 1869”, *Le Progrès*, *ibid.*
- (12) “Meeting, suite et fin”, *idem*, No 13, 26. 6. 1869.
- (13) 彼に關しては、次の文献が最も新しく詳しく、*Elfrède Wiss-Belleville, Pierre Coullery und die Anfänge der Arbeiterbewegung in Bern und der Westschweiz. Ein Beitrag zur Geschichte des schweizerischen Frühsozialismus*, Basel/Frankfurt a. M. 1987.
- (14) *Guillaume*, I, p. 61.
- (15) *Cf. La Montagne*, No 74, 22. 6.; “Le socialisme du PROGRÈS”, No 75, 24. 6.; No 80, 6. 7.; “Le jugement de M. Coullery”, No 81, 8. 7. 1869, *Le Progrès*, No 13, 26. 6.; No 14, 10. 7.; “La Montagne”, No 15, 24. 7. 1869. この両紙の争ひは、『プログレ』紙が第十五号で、『モンターニエ』紙の一切の論争を打ち切ると宣言したことに對してやむを得なかつた。
- (16) “La Montagne”, *L'Égalité*, Nos 25—27, 10, 17, 24. 7.; “Le jugement de M. Coullery I*”, No 28, 31. 7. 1869. (* II以降は結局出すに終つた) このシリーズに關しては次の文献に再録がある。B-Œuvres, V, pp. 76—105; 外川維男・左近毅編『インターミン著作集』4、白水社、一九七三年、二二二—二四一頁。
- (17) 前の表現は“Politique d'Internationale, IV”, *L'Égalité*, No 32, 28. 8. 1869; 前掲『世界の名著』四三四頁; 『インターミン著作集』4、三三〇頁。後の表現は“Suisse romande”, *idem*. Numéro spécimen, 19. 12. 1868; 『インターミン著作集』4、二〇〇頁から引用。

(8) Cf. Marc Vuilleumier, "Bakounine, l'Alliance internationale de la démocratie socialiste et la Première Internationale à Genève (1868—1869)", *Cahiers Vifredo Pareto*, vol. 4, 1964, p. 67.

(9) "L'Alliance de la démocratie socialiste. Procès-verbaux de la Section de Genève (15. 1. 1869—23. 12. 1870)". Textes présentés par Bert Andreas et Miklós Molnár in: Jacques Freymond éd., *Études et documents sur la Première Internationale en Suisse*, Genève 1964 (1) 6 同盟議事録 411 p. v. de l'Alliance 2 略 147 9) p. 162.

(20) コロビヤの再録に依拠しつゝ 9) Ibid., Annex C. (21) イタリア人の Fanelli, Gambuzzi, Frisca, スペイン人の Farga-Pellicer, Sentimon, シチリアの Schwitzguébel などである。これに対しギョームは、本文中に述べたようにル・ロクル支部のメンバーが拒否した経緯もあって決してこれには入らうとせず、誤って彼およびル・ロクル支部の他のメンバーの名前がメンバー・リストに加えられているのを一八七〇年四月に見ると、それをわざわざリストから削除させさせた (Guillaume, II, pp. 12—13)。この跡が、ネットラオのリストにもはっきりと残されている。このことから判断すると、ギョームは公然の同盟はインターナショナルと組織として競合し好ましくないが、秘密の同盟に入ることとは問題ないと考えたようである。

(22) 『マルクス・エンゲルス全集』(以下『ME全集』)と略

示) 大月書店、第十八巻、一三五頁、一三七頁、三三〇—三三一頁、三四一頁などを参照。

(23) *The General Council of the First International. Minutes, 1868—1870, Moscow* (以下 *Minutes 1868—1870* 2 略 147), pp. 134—135. ただし通知文が収録されておらずの 4 次文献を参照。Jacques Freymond éd., *La Première Internationale, Recueil de Documents* (以下 Freymond, *Recueil* 2 略 147) I. Genève 1962, p. 454; B-Devores, VI, p. 211; Guillaume, I, p. 181.

(24) P. v. de l'Alliance, p. 165.

(25) B-Devores, VI, p. 212. この時総評議会のスイス担当の通信員であった H・ユングが受け取った同盟支部の会費額は一〇四名分(一)であった (Ibid.)。この数の多さは、バクーニン流(この人数分の会費を送ることを提案したのは彼であった P. v. de l'Alliance, p. 164)のハンタリであろうか? とところで、反同盟キャンペーンの一環として、ジュネーブ支部では一八七一年の春に、総評議会とは同盟を支部として正式に認めたことは一度もなかったのだとする主張が為されるという事件が起こった。これに対し同盟支持の側は、正当にも、この通知と註二三に挙げた手紙を動かしたい証拠として反論し、結局最後には総評議会の追認を得た。したがってこの二つの通知は総評議会と同盟の関係を示す資料として重要であるが、モスクワ出版の *Minutes 1868—1870* はそれに関連資料に加え

ていない。そしてわずかにその一八七〇—一八七一年版が、ロバンの質問に関連して加入承認の事実にかろうじて言及してゐるのみである(同書五二九頁、註二六六)。資料集というような一見中立的なものにまでイデオロギーが波及する一つの例であるといえよう。

(26) E. H. Carr, *Michael Bakunin*, London 1937, p. 360; 大沢正道訳『バクーニン』現代思潮社、一九七〇年、四八八頁。

(27) 『ME全集』第三二巻、第一部、書簡番号一三六一—三八、一六一—一六三、二〇八、二一〇、第二部、三三三、三六、参照。

(28) *Guillaume*, I, p. 71.

(29) *B-Guaves*, VI, pp. 229—239. キョームの叙述(一卷、一八六一—一八八頁)はこのバクーニンの説明に完全に負つてゐる。以下この件に関する註は、直接引用を除けば、これ以外のソースに言及がある場合に限定する。

(30) 当時のジュネーヴ憲法によれば、カントン・ジュネーヴでは立法府だけでなく行政府である「国家評議会 *Conseil d'Etat*」のメンバー(七名、二年毎に選出)もまた有権者による直接選挙で選出された。これは、スイス内部においても例外的で、一般には行政府は立法府内での選挙で選出されるのが普通であった。Vgl. *Staatsverfassung für den Eidgenössischen Stand Genf. In Kraft getreten den 24. Mai 1847, Art. 65, 66, in: Bundesverfassung der*

Schweizerischen Eidgenossenschaft, nach stänmlichen in Kraft stehenden Kantonsverfassungen, Freiburg 1856, S. 518.

(31) バーゼル大会の議案に関する総評議会の決議は、七月三日の『エガリテ』に載せられた。*L'Égalité*, No 24, 3. 7. 1869.

(32) バクーニンは、この会の模様を『仲間』によってその前日から念入りに動員をかけられた建築労働者が多数出席していた」としてゐる(*B-Guaves*, VI, p. 231)。しかし前稿で述べたように、建築労働者のバクーニンに対する支持が確固たるものではなかったという事実からすれば、彼のこの主張は多少割り引いて理解する必要があるといえよう。いずれにしてもこれが、ジュネーヴにおける同盟派の工作の始まりかと思われる。『エガリテ』の七月三十一日号によれば、これは八月五日のジュネーヴ諸支部の全体会場の場で起こったと考えられる。さらに同じ史料によれば、この一週間前に行なわれた同様の集会では出席者があまりに少数であったために、実質的な討議は次週に回されたのである。したがって、この八月五日の集会にも、同盟によって「動員」された労働者を除けばそれほど多くの者は出席していなかったであろう。つまりそれを狙つての「動員」だったのである。Cf. *L'Égalité*, No 28, 31. 7. 1869.

(33) 『ME全集』第十七巻、四一四、四二四頁参照。

(34) 実際にバーゼル大会におつて代表のメンバーは、所有と相

統権の問題に關して決議を下すのは時期尚早であり、大会はより具体的なこれ以外の三議案(労働組合、普通教育、信用)により多く関心を払うべきであるとすする主張を行なつた(Freymond, *Revue*, II, pp. 46—47)。

(35) 三名の代表を選ぶための投票は八月二日—三日に行なわれた(*L'Égalité*, No 31, 21. 8. 1869)。バクーニンが決点に終わったことに関しては *idem*, No 34, 11. 9. 1869 を参照。

(36) この二つの委員会の報告は『エガリテ』三二号(八月二八日、相統権)と三三号(九月四日、土地問題)に載せられた。バクーニン大会に於て發表された(Freymond, *Revue*, II, pp. 92, 98—103)。

(37) バクーニン大会においてグロスランは「中央委員会は彼に對しては、他のジュネーヴ支部連合代表とは異なり、所有と相統権の問題に關して自由裁量で投票する権利を認めたと主張した。これに對してプロッセは、グロスランもまた彼同様、この二議案に賛成票を投じるよう拘束委任されたはずであると抗議した(*Ibid.*, p. 53)。

(38) Vuilleumier, art. cité, pp. 90—91.

(39) Michel Bakounine, *de la guerre à la Commune*. Textes de 1870—1871 établis sur les manuscrits originaux, et présentés par Fernand Rude, Paris 1972, pp. 452—453. 大会に先立って「親友團」だけの集まりを持つとい

うバクーニンのこの計画は、総評議会からのクレームを受けて規程を変更する以前の、すなわち國際社会民主同盟時代の規程の第七条(「……社会民主同盟の代表団は國際労働者協会の支部としての別の場所で開催集會を開くものとする」前稿参照)を思わせる。このことは、バクーニンの考えの中では、同盟の再編にもかかわらず、当初の計画がほとんど変化していなかったことを推察させる。

(40) 註三五に挙げた『エガリテ』九月十一日号の記事参照。

(41) Vuilleumier, art. cité, p. 82.

(42) 前稿で紹介した、同盟に關して必読であるヴェイユミエー教授の三論文参照。

(43) Freymond, *Revue*, II, p. 59.

(44) 『ME全集』第十六卷、四〇五頁。

(45) カーの前掲書のほか、G・ウドコック著、白井厚訳『アナキズム』I、II、紀伊國屋書店、一九六八年、H・アルヴァン著、左近毅訳『アナキズム』文庫クセジュ、白水社、一九七二年、H・M・ビルモヴァ著、佐野努訳『バクーニン伝』下、三一書房、一九七三年、大沢正道著『アナキズム思想史』現代思潮社、一九七四年、J・ジョル著、萩原延壽・野水瑞穂訳『アナキスト』岩波書店、一九七五年、など参照。

(46) Freymond, *Revue*, II, p. 18.

(一橋大学助手)